『DEREK』第 41 号（2022 年）

吉満義彦によるゲルトルート・フォン・ル・フォールの紹介

――雑誌『創造（L’Ordre nouveau）』を中心に――

石井　祐三子
Ishii, Yumiko

目 次

はじめに
1.　吉満義彦による『創造』創刊とその概要
1. 1.　明治初期以降の日本におけるキリスト教雑誌の出版状況
1. 1. 1.　明治初期の日本におけるキリスト教普及
1. 1. 2.　明治初期以降の日本におけるキリスト教雑誌刊行の流れ
1. 2.　雑誌『創造』について
1. 2. 1.　雑誌『創造』刊行の経緯及び目的
1. 2. 2.　『創造』における特色及び傾向
2.　吉満によるル・フォール紹介の経緯及び紹介内容
2. 1.　ル・フォールの経歴および思想
2. 2.　ル・フォールの作品との接点及び『創造』における紹介
2. 3.　吉満によるル・フォールの紹介内容
2. 4.　吉満におけるカトリシズムと文学
おわりに
参考文献表

はじめに

吉満義彦（1904–1945）は、主に昭和初期から中期にかけて活動した、日本で最初期のカトリック哲学者である。カトリック哲学者であり司祭であった岩下壮一（1889–1940）の影響により、東京帝国大学在学中にプロテスタントからカトリックへ改宗後、四十一年という短い生涯の中で数多くの論文を残した。しかし現在では、「忘れられたカトリック哲学者」と評されることがあるように、吉満自身が十分に認知されているとは言い難い状況にある。そのため、まずは本稿の考察の範囲において吉満の略歴を確認していきたい。(1)

吉満は 1904 年 10 月 13 日、鹿児島県大島郡亀津村（現徳之島町）に生まれた。鹿児島県立第一中学校二年であった 1918 年に、父義志信が亡くなったことがきっかけでプロテスタントの教会へ通うようになり、1921 年受洗している。(2)

1922 年に第一高等学校文科丙類に入学し哲学を主に学ぶとともに、内村鑑三（1861–1930）の聖書研究会に入会する。吉満は内村鑑三に心酔し、また内村も吉満に目をかけていたが、元々プロテスタンティズムに疑問を抱いていた吉満は岩下壮一との出会いを期にカトリックへ傾倒していく。そして東京帝国大学在学中の 1927 年 2 月、麻布教会にてオギュスタン・ツルペン神父から洗礼を受け、カトリックへと改宗した。(3)

1928 年から二年間フランスへ留学して哲学者のジャック・マリタン（Jacques Maritain, 1882–1973）に師事し、主にネオ・トミズム（新トマス主義）を研究した。また留学中に、ドイツのカトリック神学者であるエーリッヒ・プシュワラ（Erich Przywara, 1889–1972）との文通によって、“Analogia entis”（存在の類比）などのカトリシズムを学んでいる。

1930 年秋に帰国した吉満は、翌年より上智大学及び東京公教神学校の哲学の講師を務める。そして 1933 年 2 月にかねてからの許嫁であった小林輝子と結婚するが、脊椎カリエスを患っていた輝子は三ヶ月後に死去する。再び独り身となった吉満は、1934 年 2 月に岩下によって創立された東京信濃町の聖フィリッポ寮（現・真生会館）の舎監となり、

寮生やカトリック学生連盟の指導を行った[(4)]。また、1935 年に東京帝国大学文学部倫理学科講師に着任している。

1934 年から 1944 年の間、吉満は精力的に執筆活動を行なっていたが、1944 年 7 月にジフテリアによって一時危篤に陥る。吉満は同年秋に東京大司教に対し、病気が全快した後は聖職に就く旨を申し出たが、かねてから患っていた結核の病状悪化により 1945 年 1 月に東京小金井の聖ヨハネ会桜町病院の結核病棟に入院し、同年 10 月 23 日午前 11 時に四十一歳で死去した。

吉満の論じるカトリシズムは、岩下やマリタンやプシュワラに加え、アウグスティヌスやトマス・アクィナス、また神学者でありイギリス聖公会の司祭からカトリックに改宗して枢機卿となったジョン･ヘンリー･ニューマン（John Henry Newman, 1801–1890）の影響を受けていた。その際、吉満は神秘主義の重要性も説いていた。吉満は、神秘主義とは人間本性に宗教意識と共に内在する、神的なるものへの欲求に深く根ざしているものであり、すべての宗教意識に神秘主義が内在すると考えた（吉満 1938, 7–44）。そして、吉満は近代を無神論の時代と捉え、その人間中心的な近代精神における神秘意識は虚無主義的な宿命性神秘主義であり、近代的精神の問題は近代的無神論の問題であるとして無信仰及び無神性の蔓延する近代主義を批判し、中世的精神にたちもどる「新しき中世」への道を探った（吉満 1979, 59–82）。

また、吉満はマリタンがそうであったように、カトリシズムにおける文化や芸術の意義も強調した。現世の一切は Caritas（神愛）に基づいて秩序づけられ、芸術や思索を含むすべての文化もこの愛によって成り立っており、社会と文化のうちに霊性の優位を樹立すべきだと主張した（吉満 1941, 44–55）。そのような吉満の影響はカトリック思想界のみならず、作家の堀辰雄（1904–1953）や遠藤周作（1923–1996）、哲学者の加藤周一（1919–2008）、哲学者であり言語学者の井筒俊彦（1914–1993）、詩人であり批評家の越知保夫（1911–1961）、仏文学者であり批評家の渡辺一夫（1901–1975）などにも及んだ。特に遠藤の場合、吉満の導きに

よって文学の道へ進んだという経緯があったため、生存中吉満を「恩師の一人」と呼んだという（小野寺 2004, 246）。

吉満は上智大学や東京帝国大学などで教鞭を執る傍ら、執筆活動や座談会への参加などで自らのカトリシズムに則った主張や理論を発表し続けた。昭和初期までの日本において、カトリックは知的階級への宣教に関してプロテスタントの後手に回っていた。そのため、岩下が日本での知的階級の人々へのカトリック普及活動を志し、その活動に同意した吉満をはじめとした若者が岩下の後に続くべく、文化活動によるカトリック普及の道を模索していた。知的階級の人々へのカトリック普及活動のために吉満が取り組んだことの特徴のひとつは、カトリック文学を積極的に取り上げたことである。吉満は哲学だけでなく文学にも通じ、詩や文学の評論も手がけ、特にリルケ（Rainer maria Rilke, 1875–1926）やシャルル・ペギー（Charles Péguy, 1873–1914）を好んで取り上げた。そのため、親交のあった核化学者の垣花秀武（1920–2017）から「詩人哲学者」と呼ばれたという。

そうした吉満の主な業績の一つとして挙げられるのが、キリスト教文芸雑誌『創造（L'Ordre nouveau）』の創刊である（図 1 参照）。フランス留学帰国後である 1934 年に創刊した『創造』は、当時十五年戦争の最中であった日本において、紙統制などの状況悪化により 1940 年に十六号であえなく廃刊となってしまう。しかし吉満の知人である文学者に留まらず、当時の日本では無名であった海外のキリスト教文学を取り上げた『創造』の存在は、日本におけるカトリシズム普及のみならず、以下で触れるように海外文学研究の分野においても大きな影響を与えた。

『創造』に掲載された海外のキリスト教作家には、ポール・クローデル（Paul Claudel, 1868–1955）のような著名な作家と並び、ゲルトルート・フォン・ル・フォール（Gertrud von le Fort, 1876–1971）やライサ・マリタン（Raissa Maritain, 1883–1960）のように、当時の日本では無名の作家がいた。その中でも吉満は、ル・フォールに「ドイツのクローデル」という称号を与え、『創造』への作品掲載の際も彼自らが彼女の紹

介文を執筆した。また、吉満自身の論文でも彼女について触れているものが複数存在し、例えば 1942 年に発表された論文「現代における神秘主義の問題」では、彼女の小説である『断頭台の最後の女（Die Letzte am Schafott, 1931）』を推薦していることをみても、彼女に対して特別な関心が向けられていることがわかるであろう。なお、後に文芸評論家の柘植光彦（1938–2011）は、この作品が遠藤の『沈黙（1966）』や『最後の殉教者（1974）』の執筆に影響を与えたと考察している（柘植 2008, 41）。しかし現在の日本において、ル・フォールも吉満同様十分に認知されているとは言い難い状況にあるといえよう。

こうしたことをふまえ、本稿では吉満によるル・フォールの紹介がどのようなものであったのかみていきたい。そのためにはまず、ル・フォールが紹介された『創造』がどのような雑誌であったかを確認しておく必要がある。『創造』創刊の背景には、岩下が先鞭をつけた文化活動によるカトリック普及運動、とりわけ出版活動によるカトリシズム文化運動の方向性の継承があったと思われる。そのため、吉満による『創造』創刊に繋がる岩下らによる出版活動及びそれに先立つキリスト教雑誌の出版活動についてもここで確認することとする。

1. 吉満義彦による『創造』創刊とその概要

1.1. 明治初期以降の日本におけるキリスト教雑誌の出版状況

1.1.1. 明治初期の日本におけるキリスト教普及

『創造』の創刊についてみていくうえで、そもそも、キリスト教関連雑誌の出版状況がどのような状況にあったのか、その概要を確認しておきたい[(5)]。さかのぼれば日本では、1612 年に禁教令が発布されて以来、政府によるキリスト教禁制が続いていた。しかし、1873 年に切支丹高札が撤去されたことによって、日本でもキリスト教の普及が公然と認められるようになった。

日本での普及が軌道に乗ったのは、カトリックよりもプロテスタントの方が先であった。1858 年日米修好通商条約締結後、1854 年にペリー艦

隊の通訳を務めたサミュエル・ウェルズ・ウィリアムズ（Samuel Wells Williams, 1812–1884）からの要請により、1859 年 5 月にアメリカの監督派[(6)]、長老派、改革派の三教派の教会より宣教師が派遣された。日本への入国が許された宣教師らは日本人への宣教は認められなかったものの、日本人を対象とした洋学塾の開講や、また他の洋学塾の洋学の講師職に就くなどして、いずれ訪れるであろう宣教の時への準備を行っていた。

切支丹高札撤廃後、プロテスタント諸教派の宣教師たちによる教会及び学校設立が相次いだ。また出版事業にも積極的に取り組み、聖書や讃美歌集などに代表される伝道文書の出版や信徒個人による出版社設立が多くみられた[(7)]。このように、教育活動や文書伝道などのような知的分野における普及の方針をとったため、新しい知識を求める青年層に影響を与えた。

一方、カトリックもプロテスタントに遅れること四ヶ月後の 1859 年 9 月に、日本での宣教を担当していたパリ外国宣教会の日本教区長であるプリュダンス＝セラファン＝バルテルミー＝ジラール神父（Prudence Séraphin Barthélemy Girard, 1821–1867）がフランス領事館付通訳職として来日。1862 年 1 月に横浜居留地に天主堂を建立したが、2 月に幕府によって参観者が五十五人逮捕される。翌月、日本語での説教禁止という条件を付して放免されたが、その後も 1865 年に長崎に建立された天主堂において、潜伏キリシタンが発見されたことによって起きた 1867 年の浦上四番崩れなどのように、幕府からの弾圧が続いた。

その後、切支丹高札撤廃及び切支丹放還令によって迫害が終わったことにより、カトリックもパリ外国宣教会から宣教師を増員し本格的に日本での宣教を開始した。しかし、プロテスタント宣教師のように講師などの職を得られず、当時のフランスの財政悪化の影響で資金不足に陥る。加えてローマ教皇庁による近代社会批判の風潮によって、プロテスタントのような近代社会建設に興味を示す青年向けの教育事業には消極的であった。そのためカトリックは第一目的であった日本人聖職者育成と並行して、辺境地や貧困に苦しむ人々への伝道を行った。しかし当時の近

代化が進む日本社会において、比較的裕福な知的階級の信徒が多いプロテスタントに対し、カトリックは影響力を及ぼすまでには至らなかった。

教育事業のみならず出版事業においても同様に、カトリックはプロテスタントと比較すると資金及び人員不足によって出遅れた状態であった。特に一般信徒対象の定期雑誌刊行において、その傾向は顕著に表れていた。ここからは実際にどのような状況であったか、明治以降のキリスト教専門定期雑誌の刊行状況を確認していく。

1.1.2. 明治初期以降の日本におけるキリスト教雑誌刊行の流れ

プロテスタントは一般信徒対象の定期雑誌の刊行に関しても、カトリックよりも早い時期に着手した。日本における最初のプロテスタント系雑誌は、1875 年に今村謙吉、村上俊吉によって発刊された『七一雑報』である。内容としては家庭等の啓蒙的なものが中心であったが、当時の教会の事情についての内容も掲載されていた。

続いて、翌年の 1876 年には子ども向け雑誌『よろこびのおとづれ』、そして 1880 年に『六合雑誌』が創刊された。『六合雑誌』は『七一雑報』とは異なりキリスト教総合雑誌としての色合いが強く、牧師であり神学者の小崎弘道（1856–1938）や牧師であり評論家の植村正久（1858–1925）が執筆及び運営に関わっている。そして、1883 年 5 月に開催された第三回全国基督信徒大親睦会にて『東京毎週新報』の発刊が取り決められ、同年 8 月にキリスト教専門の総合雑誌として創刊された。

その後もプロテスタント系の雑誌は次々と創刊されていき、1885 年に『女学雑誌』、1887 年は徳富蘇峰による『国民之友』、そして 1888 年には『聖書之友月報』や『東京婦人矯風雑誌』、1889 年『真理』が創刊されるなど、枚挙にいとまがない。今回は一部の雑誌の名を挙げたに過ぎないが、雑誌名に目を通しただけでも数多くの幅広い層の人々が対象であったことは明白であろう。

それに対してカトリック系雑誌が刊行されたのは、『七一雑報』から遅れること六年後の 1881 年であった。同年 5 月にカトリック系最初の

月刊雑誌となった『公教万報』、7 月に『聖教雑誌』が創刊された。しかしその後を追って『公教雑誌』が創刊されたのは、それから更に八年経った 1889 年であった。その後、1891 年にルモアーヌ神父主幹による『声』、1898 年三才社発行の『天地人』、1903 年には東京教区初日本人司祭である前田長太神父による『通俗宗教談』、そして 1905 年『新理想』が創刊された。

大正時代になると定期雑誌の出版事業も活発化するようになり、1916 年に日本最初のカトリック系週刊誌の『光明』が創刊、また信徒以外の教外者のカトリック研究への要望を満たす目的で 1920 年に雑誌『カトリック』[8]、そして 1923 年に後に『カトリック新聞』となる『公教青年時報』が創刊される。

昭和に入ると日本政府による国家神道の強化が進められ、1928 年の張作霖爆殺事件、そして 1931 年の満州事変勃発によって日本は十五年戦争へと突入していき、国家による宗教団体への取締も強化された。その後、1940 年 12 月の内閣情報局設立により出版物の指導取締がより厳しくなり、その状況は太平洋戦争が終戦した 1945 年まで続いた。

今回取り上げる『創造』は、十五年戦争の期間である 1931 年から 1940 年に刊行されている。当時統制が厳しかったにもかかわらず、あえてこの時期に『創造』を刊行した目的を探るために、ここからは雑誌『創造』の歴史と『創造』の特徴及び傾向をみていきたい。

1.2. 雑誌『創造』について

1.2.1. 雑誌『創造』刊行の経緯及び目的

『創造』は 1934 年 10 月に、吉満と法学者の山之内一郎（1896–1959）、仏文学者の木村太郎（1899–1989）、作家志望の林不可止（生年不明–1940）の四名によって創刊された。

ここからは、『創造』の代表発行人であった山之内が、1946 年発行の『カトリック思想――吉満義彦追悼号』のために執筆した「『創造』と吉満さん」を追いながら、雑誌『創造』発刊までの経緯をみていくことと

する。

山之内は、高円寺教会でフランス留学の帰国直後の吉満と出会う。そして、当時カトリック文化運動に興味を持っていた親友の林と木村とともに、吉満による「霊性の優位」の講話を聞く機会を得る。その後打ち解けた四人は、共同作業でもの作りを行うことを思いつき、カトリック文化運動の一環として雑誌を発刊することとなる。

山之内と林は、仏文学の研究者の木村と哲学者の吉満の関係が深くなることによって文学と哲学が結合し、自分たちがカトリック文化運動を起こす機会を得ることになるのではないかと考えていた。その後二人の思惑通りに事は進み、カトリック文化運動の一環として文学と哲学を主に扱う文芸誌『創造』が創刊された。山之内によると、雑誌の題名から方向性や装丁、活字に至るまで吉満の意向が最優先されたとのことで、『創造』の刊行には吉満を中心とした運営が行われていたことが窺える。

山之内と林が、カトリック文化運動を起こすために文学と哲学の結合が必要だ、と考えた理由は明らかにされていない。しかし少なくとも吉満に関しては、『創造』創刊への前向きな様子や、1934 年発表の「文學者と哲學者と聖者――モラリテの問題をめぐつて――」や 1937 年発表の「詩と實存と愛――新しきモラルの問題――」などの論文をみる限り、文学と哲学の結合に対して肯定的であったと思われる。

吉満等によるカトリック文化運動がなぜ雑誌創刊だったのか、理由は明らかにされていないが、文学と哲学によるカトリシズム伝道の手段として雑誌刊行が最適と考えた可能性はあるだろう。加えて、吉満の弟である吉満義敏が以前より郵政省で働く傍ら「吉水敏」の名で詩作活動を行っており、『四季』や『コギト』への投稿や仲間と同人雑誌を刊行していたことによる影響もあったと考えられる。実際、『創造』創刊前に義敏は『海洋の巨匠に花束を』という同人雑誌を刊行しており、吉満をはじめとした『創造』創刊時の編集員も投稿を行なっている。また義敏も『創造』創刊のサポートをしており、『創造』全号に詩作品の投稿を行なうなど『創造』運営に深く関わっていた。

このようにして創刊された『創造』は、わずか十六号で終刊を迎えたのにもかかわらず、カトリシズム普及のみならず海外文学研究や宗教研究などの分野において影響を与えていった。その理由を探るために、次からは『創造』における特色及び傾向をみていく。

1.2.2.『創造』における特色及び傾向

上記の手記の中で、山之内は『創造』を「文芸同人誌」と称している。同人誌という性格上、『創造』への投稿者は吉満ら編集員の人脈からなる人々が中心であった。

内容は吉満の評論を軸として、創作小説、詩、エッセイが中心であり、加えてライサ・マリタンなどの海外作家による文芸作品が、木村や翻訳家であり評論家の辻野久憲（1909–1937）等による翻訳で掲載された。また創刊号で掲載した海外作家の作品はライサ・マリタンとクローデルの二作品のみであったが、四号以降は二倍以上に増加し、それに伴い英文学者の酒井善孝（1902–1982）や評論家の河上徹太郎（1902–1980）等による海外作品の書評も掲載されるようになった。

四号より、吉満と同様に岩下に師事した宗教社会学者の小林珍雄（1902–1980）が参加し、小林による海外のカトリック文学や教育などの文化と宗教との関係についての現状報告の連載が開始された。その結果、林や詩人の岡崎清一郎（1900–1986）等の同人による創作作品の掲載は以前の半分程度となり、『創造』は海外文化を伝える役目も果たすようになった。

編集員の投稿を中心として創刊された『創造』が、徐々に海外の作品や文化を紹介する雑誌へと変貌したのは、留学経験のある吉満や仏文学研究者の木村などが編集員の中心にいたため当然の流れであったと思われる。しかし吉満が作品の訳を担当した海外作家は、ル・フォール一人のみであった。このことから、吉満がル・フォールの作品掲載に積極的であったことが窺える。当時まだ日本に紹介されていなかったル・フォールを、なぜ吉満が『創造』に作品掲載をしようと考えたのか、次

章においてその経緯や理由について吉満によるル・フォールの紹介文等から読み解いていくこととする。そのためにまず簡潔に、ル・フォールの経歴や思想を確認しておきたい。

2. 吉満によるル・フォール紹介の経緯及び紹介内容

2.1. ル・フォールの経歴および思想

ル・フォール（本名 Gertrud Auguste Lina Elsbeth Mathilde Petrea von le Fort）は、1876 年 10 月 11 日にドイツのミンデンで生まれた[(9)]。ル・フォールは福音主義の家系に育ち、自身も幼児の頃に福音主義の教会にて受洗したが、1926 年にローマにて福音主義からローマ・カトリック教会へと改宗している。彼女は改宗の理由を「カトリック教会のなかにみずからの故郷を見出した」（フォン・ル・フォール 1959, 27）と書き残しているが、1925 年のプシュワラとの出会いも改宗への理由の一つではないかと思われる。

1908 年にル・フォールは、三十二歳でハイデルベルク大学の聴講生となった。彼女は同大学で神学と史学を学び、生涯の師匠となったドイツの神学者であり歴史哲学者であったエルンスト・トレルチ（Ernst Troeltsch, 1865–1923）と出会っている。

1924 年に、1922 年から 24 年にかけて一種の抒情詩的日記として執筆していた『教会への讃歌（Hymnen an die Kirche, 1924）』を出版し、クローデルから高い評価を得たことがきっかけで、本格的に執筆活動を開始する。

1933 年にナチス政権が成立したために、ドイツ国外に亡命する作家も多く見られたが、彼女はドイツ国内に留まり執筆活動を続けていた[(10)]。しかし 1938 年に、三十年戦争（1618–1648）での「マグデブルクの戦い」（1631）を舞台とした作品である『マグデブルクの婚礼（Die Magdeburgische Hochzeit, 1938）』が、当時ドイツで政権を握っていたナチスに「好ましからざるもの」と判断され、以降ナチスによる文学史からル・フォールの名は削除された。

1949 年に、ヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse, 1877–1962）の推薦によりノーベル文学賞候補となったが、受賞は逃してしまう。しかし 1950 年にドイツ芸術院言語・文学部門の正会員、1955 年にベルリン芸術院の正会員になり、1966 年の九十歳の誕生日にドイツ連邦功労十字章勲章を授与した。そして、その五年後である 1971 年、カトリックでは諸聖人の日にあたる 11 月 1 日に九十五歳で死去した。

ル・フォールは世界平和実現に必要な要素として、世界中の人々が一つの思想によって結合され、一つの精神的共同体として統一することが重要であると考えていた。そして、その一つの思想こそがキリスト教であると考えていた。彼女は神秘主義者でもあり、これは師であるトレルチ、そして親交があった哲学者でありカルメル会修道女であったエディット・シュタイン（Edith Stein, 1891–1942）及びプシュワラの影響によるものと考えられる。

また、宗教的及び文化哲学的女性論のエッセイである『永遠の女性（Die Ewige Frau, 1934）』の執筆により、カトリックにおける女性論者とも言われている。この作品については吉満も論文で取り上げているが、詳細については後程触れることとする。

次に吉満とル・フォールとの作品との接点を探り、その上で『創造』に掲載されたル・フォールの作品とその紹介についてみていきたい。

2.2. ル・フォールの作品との接点及び『創造』における紹介

まだ日本では無名であったル・フォールに吉満が関心を向けた理由は、おそらくプシュワラとの交流によってであったと思われる。

吉満はフランス留学中、友人にプシュワラの著作を読むことを勧められた。当時、ドイツの知識人でも難解だと評判であったプシュワラの論文を「自分にはかえってわかりやすい」と感じた吉満は、留学中に三千頁にわたるプシュワラの全著作を読み終えてしまう。その後プシュワラ本人と縁あって文通が開始され、プシュワラからカトリシズムについて指導を受けたのは前述の通りである。

一方、ル・フォールにとっても、プシュワラはカトリシズムにおいて精神的指導者という存在であった。第一次世界大戦後の 1920 年代は、作家であり思想家のテオドール・ヘッカー（Theodor Haecker, 1879–1945）やシュタインを含めたドイツの知識人がカトリックへ改宗する動きがみられたが、その多くのケースがプシュワラによる影響及び指導によるものであり、ル・フォールもその中の一人であった。

こうしたことから、吉満がプシュワラを経由してル・フォールを知ったということは十分に考えられる。また、『創造』四号に掲載された吉満執筆による「ゲルトルード・フォン・ルフォールについて」という小文をみると、そこで吉満はル・フォールを「現代ドイツのカトリック神秘詩人」という肩書きで紹介し、同号で掲載した作品『聖心を祝へる蓮禱』についてプシュワラの論文「深淵の人間」に引用されていたものだと説明している。

その上で、吉満が具体的に取り上げている作品について確認しておきたい。ル・フォールの作品が『創造』に掲載されたのは四回だが、そのうち二回は一つの作品を分けて掲載しているので実際に掲載されたのは三作品である。

『創造』にはじめてル・フォールの作品が掲載されたのは、先に見た 1935 年 7 月に発行された四号であり、そこで「『聖心を祝へる蓮禱』より」という題名がつけられた吉満の訳による短い詩が載せられた（図 2 参照）。掲載された詩は、『教会への讃歌』に収録されている「聖心の祝日の連禱（“Litanei zum Fest des allerheiligsten Herzens”）」の一部であり、全部で二箇所引用されている。また、同号には吉満執筆によるル・フォールの紹介文が掲載されており、これが日本でル・フォールが紹介された最初の文献と思われる。[11]

二回目の掲載は、それから二年近く経った 1937 年 5 月に発行された十一号である。同号では「女性と文學」の特集を組んでおり、その中でル・フォールの『教会への讃歌』の一部が『教会讃歌』という題名で再び吉満の訳によって掲載された。掲載された箇所は「教会への帰還」第

六連と、「教会の一年」に収録された「復活祭」である。加えて、同号には吉満による論文「象徴としての女性」が掲載されている。この論文はカトリックにおける女性論をテーマとし、その中でル・フォールの『永遠の女性』を取り上げている。

そして 1938 年 12 月発行の十四号及び 1940 年 5 月発行の十六号の二回にわけて『断頭台の最後の女（Die Letzte am Schafott, 1931）』が、小林の訳によって『斷頭臺下の最後の女』という題名で掲載されている。しかし十六号刊行後、突然の終刊となったため作品の前半のみの掲載に留まった。

2.3. 吉満によるル・フォールの紹介内容

以上をふまえ、吉満によるル・フォールの紹介内容についてさらにみていくこととする。再び「ゲルトルード・フォン・ルフォールについて」の内容に目をやると、まずル・フォール自身についての説明と掲載された詩についての説明があり、それと共にル・フォールの作品として、『教会への讃歌』『ヴェロニカの手巾（Das Schweißtuch der Veronika, 1946）』『ゲットー出身の教皇（Der Papst aus dem Ghetto, 1930）』の簡単な紹介がされている。

なお、四号の刊行後、『創造』とそれ以外の雑誌で吉満は、合わせて七本の論文でル・フォールを取り上げている。そのうちの三本（「神秘主義概論（後に「神秘主義と二十世紀思想」に改題。1938）」、「文学におけるカトリシズム（1939）」、「カトリシズムの理解のために（発表年不明）」）はル・フォールと作品の紹介のみに留まっているためここでは除外し、残りの四本の論文について発表順に、ル・フォールに関してどのようなことが述べられているかみていきたい。

『創造』五号（1935 年 10 月発行）に掲載された「時間の變貌――歴史と詩と行動」で、吉満は実存的苦悩が表面に放出された時とそのような世界を「夜」と呼んでいる。そしてル・フォールが、吉満の考える「夜」に対する苦悩と、その「夜」の下で見られた神による神秘や神の摂理の

十字架的理解を文学作品で表現していることに対して、「こは正に眞實カトリック的實在とともに古くして永遠に新しいカルメリット的敬虔のうちに生ける體驗であつたのだ」（吉満 1935c, 12）と書いている。そして最後にル・フォールの『教会への讃歌』から、「受難節（Passion）」の第四連の最後の箇所を引用した。この詩は教会が「わたし」に語りかける言葉を綴る形をとっており、苦難や苦悩のうちに神の愛が潜んでいる様子を描いている。

次に、「女性と文學」の特集を組んだ『創造』の十一号（1937 年 5 月発行）にて掲載された「象徴としての女性――神學的アントロポロギイの問題――」では、ル・フォールの『永遠の女性』を取り上げ、内容について紹介及び分析を行っている。そこで吉満は、ル・フォールによる女性及び母性に対する主張を肯定しつつ、クローデルの『マリアのお告げ（L'annonce faite à Marie, 1912）』と並べ、教会における女性の本来的意義を「そはたゞに女性の救ひたるのみならず女性による救ひの秘義である」（吉満 1937b, 61）と考えた。そして、「われわれに取つて女性の使命を省察する事はやがて現實の全領域を見出す事であり單に女性的なるものを超えて世界神秘にたずね入る事である」（吉満 1937b, 62）と論じた。

なおこの稿は『創造』掲載後、単行本『詩と愛と実存』（1948、角川書店）に収録されたが、出版時に付記としてル・フォールについての説明が書き加えられた。吉満はル・フォールを、長編小説『ヴェロニカの手巾』によってドイツ文学史に不朽の価値を獲得した作家だと位置づけた上で、彼女の作品には一貫として「贖罪の救済史的見地において現世の歴史を把握せんとする態度」（吉満 1948, 221）があると語り、『断頭台の最後の女』をキルケゴールの『不安の概念』やドストエフスキーの『白痴』と並んで意味づけられる作品だとして以下のように説明している。

> その手法は自然主義乃至心理主義を脱却せる神學的象徴的實存分析の故に文學以上の文學であり、むしろ凡そ眞の人類の古典的文學のもつ神學的哲學的意味を、近代的人間の自意識の苦悩をくぐった地

> 點で表現せるものとも言へる。（吉満 1948, 221）

三本目の論文である、『理想』1942 年 10 月号掲載の「現代における神秘主義の問題」であるが、この稿の本文ではル・フォールに関する記述はみられない。しかしプシュワラの著作に関する注の欄にて、プシュワラが著作内でル・フォールを現代神秘詩人作家として取り上げていることに触れ、「カルメル的敬虔のミスティクの息吹きする神秘的リアリズムの代表的作品」（吉満　1942, 25）として『断頭台の最後の女』を推薦している。

そして 1943 年に『新潮』5 月号にて発表された「パスカルの心戦に因んで――モオリアツク氏への手紙」では、吉満はフランスの作家であるフランソワ・モーリアック（François Mauriac, 1885–1970）の『ブレーズ・パスカルとその妹ジャクリーヌ（Blaise Pascal et sa sœur Jacqueline, 1931）』を読んで、以下のような言葉を連想する。

> 「弱さが強さ」、「所詮は心の大いさ愛の大いさのみが一切である」、ニイチエ的「價値の轉倒」の再轉倒、奴隷的價値秩序ではなく、人間的英雄性への逆説としての恩寵の論理……（吉満 1943, 19）

そして、この作品と『断頭台の最後の女』が共通のテーマを扱っていることを指摘し、その上で『断頭台の最後の女』について以下のように触れた。

> つまりそこには、人間性の不安と弱さが恩寵の秩序において、人間的英雄性の剛毅に増して、さらに高次の強さの證示となるものが描いてあつたわけです。（吉満 1943, 19）

以上、吉満によるル・フォールの紹介をたどってきたが、吉満がル・フォールを、神秘主義的思想を基盤とした作家および思想家として評価

していたことがわかるであろう。吉満はル・フォールの作品による、神を忘れた近代人の苦悩を通して、神秘思想における苦悩と神との関係性を表現した手法に、文学的のみならず神学的及び哲学的意味を見出していたのではないだろうか。

2.4. 吉満におけるカトリシズムと文学

これまでみてきたように、吉満はカトリシズム普及を目的とした『創造』にて、ル・フォールを積極的に取り上げていた。その上で、吉満の目指したカトリシズムとル・フォールの作品のあいだにはどのような本質的関係があるのかを、さらに読み解いてゆく必要がある。そうしたさらなる考察のために、ここでは、吉満におけるカトリシズムと文学の関係、そして、そこにル・フォールがどのようにあてはまると考えられるのか、一定の見通しを示しておきたい。

吉満は『創造』創刊号（1934 年 10 月発行）で発表した「文學者と哲學者と聖者――モラリテの問題をめぐつて――」にて、文学と哲学の本来の意義について次のように語っている。文学は人間の真実を語るものであり、真理と謙遜が常に伴うものである。そのため、作家の空想や自惚れ、また自らの不安の解釈などを書くことによって、文学作品としての力を失う。また哲学は真実を目指し、真理発見の道のみを求めるものである。真実を見極めるために必要なのは、最も無私で他意なき貧しい心である。そして、真実は「神の慈愛を以てせる如く、俊嚴なるリアリズムのうちに救濟の『言葉』を含む觀告と愛と祈りを以てする指導」（吉満 1934, 6）であると定義した。そして真実を語ることが可能となる条件として謙遜と純粋性を挙げており、「聖者の書く文學があったら、恐らくはそれが眞實の人間喜劇の文字であるであらう」（吉満 1934, 5）と書いている。

吉満が、文学において真実と純粋性を重視したことは、『文藝』1939 年 7 月号に掲載された「文學におけるカトリシズム」での以下の記述からも窺える。

> カトリシズムに取つては人間性のこの實存的意識のモメントなしには純粋性は存しない。つまり聖性の外に純粋性はない。此の人間性を忘れた所に妄想される純粋詩純粋文學は一つの抽象であり、高揚ではなく堕落である。（吉満 1939, 78）

吉満は文学に対して、作家自身の文学的知性のみでなく文学的良心、すなわち作家自身の精神性も問うた。そして作家の想像力にのみ頼った作品を否定し、真実を伝えることを要求した。

ル・フォールの『断頭台の最後の女』は史実を基にした創作作品であるが、神の恩寵によって強くなり自己を犠牲とする弱き少女ブランシュの精神を描いたこの作品を、吉満は「より歴史理解的な歴史神學的な作品」（吉満 1939, 79）と表現している。このような作品が成り立つ条件として、吉満は作家自らが透明化して人間悲劇を神学的摂理性において見ることを挙げている。吉満がこの作品と『ブレーズ・パスカルとその妹ジャクリーヌ』との共通したテーマが、「人間性の不安と弱さが恩寵によって強さと化す」であると述べたことは前述の通りである。

また、吉満が文学に対して重視したもう一つの点は、苦悩と神の愛による救済が描かれていることである。1935 年に発表した「文学とロゴス」に、吉満は以下のように書いている。

> かくして詩もまた人間的作品なる限り、人間的苦行を知らぬ「純粋詩」をわれわれはこの文学的人間に期待しないのである。（吉満 1985[初出 1935b], 386）

本稿では詳しく言及しなかったが、吉満が引用したル・フォールの詩には、人間の抱える苦悩に対する神からの応答という名の救済が描かれているという共通点がある。吉満によるカトリシズムには、常に苦悩と神の愛による救済が存在していた。

木村は、『カトリック思想――吉満義彦追悼号』に掲載した、吉満の追

悼文である「吉満追悼断章」において、生前吉満が「十字架の夜」という言葉を多用したが、それは十字架の夜は復活の朝につながると考えていたからではないかと書いている。吉満にとっての苦悩は、後に神からの愛による救済が約束されていたものであった。当時の日本は十五年戦争の最中であり、人々は戦いによって翻弄され、言論の自由も失い、苦悩の下に置かれていた。そのような人々に対して、吉満は苦悩と神の愛による救済というカトリシズムを伝える役割を、ル・フォールに託したといえよう。

おわりに

1942 年に行われた「近代の超克」座談会において、吉満は評論家の小林秀雄（1902–1983）に「文章が難解だ」と指摘され、こう答えている。

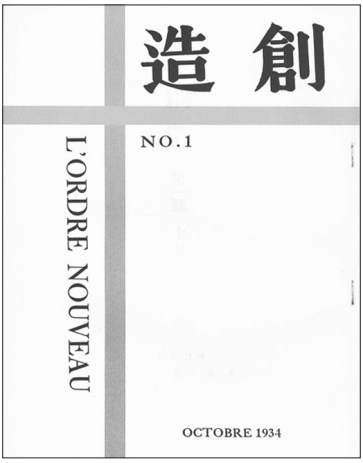
> 正直なことを言へば、分り易く書かれた哲学者の物があるが、それは一寸厭である。なぜかといへば高みから人を教へるやうで……。分らせるといふ努力は堕落だと思ふ。（河上他・竹内編 1979, 250）

思想を人々に伝える手段として、文学が用いられるケースが度々見受けられる。それは思想による文章に慣れていない人々に対して、容易に内容が伝わることを目的とした作者側の配慮である場合が多い。しかし吉満は、自らの文章を平易化して人々に理解させようとする行為自体を堕落だと感じていた。それは、文学を思想を伝える手段として用いる行為も同様であろう。

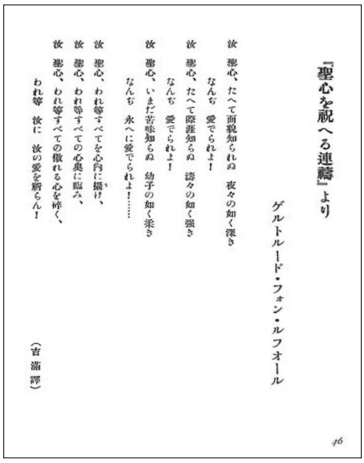
吉満はカトリシズム文化運動の一環として文芸誌『創造』を刊行したが、カトリシズムを伝えるためには真実を語り発見する文学と哲学の両者の結合が必須条件であった。吉満は『創造』十号（1937 年 1 月発行）にて発表した「詩と實存と愛――新しきモラルの問題――」において、近代の世俗化社会への危惧を以下のように語っている。

> 人間を発見したはずの近代は人間ではなく法則を世界を社会をそして身体を発見したが、理性を魂を家庭をそして愛と詩を見失ったのではないか。（吉満 1937a, 9）

吉満による『創造』創刊は、この見失ったものを取り戻した上で、真実と神の再発見を、苦悩の中にいる当時の日本の人々に求めた活動であったといえよう。しかし、神を忘れ人間性を発見したはずの近代における世俗化社会が、その後進んだ道は世界戦争への道であった。そのなかにあって、吉満は、真の文化は常に宗教性を伴うものであり、文化は宗教によって生命づけられ高揚されると考えた。これほどにも人間が人間性を見失った社会にあって吉満は、先に見たように理性や愛や詩という真実を語る術をも見失ったことを嘆きつつも、復活の朝を迎えるために必要な霊性や神秘思想をル・フォールの作品に見出していた。では、そうした霊性や神秘思想とはいったいどういうものであるのか。これからさらに、吉満のル・フォール論を読み解きつつ考えてゆきたい。



（図 1）『創造』創刊号表紙（1934 年 10 月発行）


『聖心を祝へる連禱』より

ゲルトルード・フォン・ルフォール

汝　聖心、たへて面窶知られぬ　夜々の如く深き
　なんぢ　愛でられよ！
汝　聖心、たへて陰翳知らぬ　諸々の如く強き
　なんぢ　愛でられよ！
汝　聖心、いまだ苦味知らぬ　幼子の如く柔き
　なんぢ　永へに愛でられよ！……
汝　聖心、われ等すべてを心内に抱け、
汝　聖心、われ等すべての心奥に隠み、
汝　聖心、われ等すべての散れる心を卒く、
　われ等　汝に　汝の愛を贈らん！

（吉満　譯）

46

（図 2）フォン・ル・フォール、ゲルトルート、1935、「『聖心を祝える連禱』より」吉満義彦訳『創造』四号、三才社、46 頁。

注

（1） 吉満の略歴については、以下の文献を主に参照した。

・吉満義彦、1985、『吉満義彦全集』五巻、講談社。

・吉満義彦帰天 50 周年記念出版の会編、1997、『永遠の詩人哲学者吉満義彦――帰天 50 年によせて』ドン・ボスコ社。

・若松英輔、2014、『吉満義彦――詩と天使の形而上学』岩波書店。

・『カトリック思想――吉満義彦追悼号』、1946、カトリック研究社。

（2） 南日本新聞社徳之島支局長であった中山朋之は、徳之島亀津教会史史料等による調査の結果、吉満が受洗した教会は日本メソヂスト南島宣教部・徳之島亀津（教会）講義所（現・日本キリスト教団徳之島伝道所）であろうと推測している（中山朋之、1992、「詩人哲学者・吉満義彦への断章（3）」『潮風』第 3 号、17–27 頁）。

（3） 麻布教会の洗礼台帳の二七六九番の吉満の洗礼の記録によると、この時の代父は同じく岩下に師事した法学者の田中耕太郎（1890–1974）であった。また、再洗礼ではなく条件付洗礼（カトリック教会では基本的に再洗礼は認められていないが、既に別の教会で受けたものの本人の洗礼の記憶が曖昧であったり、洗礼が正式に行われていなかったと判断された場合にのみ、改めて洗礼を受けることを認めている）として行われた（榎本昌弘、1997、「カトリックへの道」吉満義彦帰天 50 周年記念出版の会編『永遠の詩人哲学者吉満義彦――帰天 50 年によせて』ドン・ボスコ社、219–229 頁）。

（4） 当時の聖フィリッポ寮の寮生の代表的な人物として、1943 年に入寮した遠藤周作が挙げられる。慶應義塾大学文学部予科に入学した遠藤は当初哲学志望であったが、吉満に文学への転向を勧められ、堀辰雄や亀井勝一郎を紹介されたことによって作家への道を歩き出すこととなった（山根道公、2008、「吉満義彦体験――その影響と超克」柘植光彦編『遠藤周作――挑発する作家』至文堂、36–46 頁）。

（5） 日本におけるキリスト教普及の歴史及びキリスト教関連雑誌の出版状況については、以下の文献を主に参照した。

・青木玄、1987、「明治・大正・昭和初期カトリック信徒の宣教活動」『南山神学』第 10 号、177–196 頁。

・海老沢有道・大内三郎、1970、『日本キリスト教史』日本基督教団出版局。
・三好千春、2021、『時の階段を下りながら――近現代日本カトリック教会史序説』オリエンス宗教研究所。
・オーベール、ロジェ他、上智大学中世思想研究所編、1997、『キリスト教史 9――自由主義とキリスト教』平凡社。
・日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、1988、『日本キリスト教歴史大事典』教文館。

(6) 1887 年に監督派、英国教会伝道会社、英国福音伝播会社との三者で合同教会となり、日本聖公会が誕生した。また、翌 1888 年にはカナダ英国教会伝道会社が加わっている。

(7) 1944 年の出版企業整備令によって、プロテスタント系出版社 10 社（長崎書店、新生堂、日曜世界社、日本聖書協会、教文館出版部、キリスト教思想叢書刊行会、愛の事業社、警醒社、一粒社、基督教出版社）が統合させられることとなり、1944 年 10 月に新教出版社が設立された。その後、敗戦によって出版の自由が回復し、日本聖書協会と教文館出版部が独立。また、日本 YMCA 同盟出版部のように出版活動を再開する出版社や、キリスト新聞社（1946）やいのちのことば社（1950）のように新たに創業された出版社も多くみられた。そのため、キリスト教専門の全国的な流通機構が必要となり、1968 年に日本キリスト教書販売会社（日キ販）が設立された。

(8) 雑誌『カトリック』は 1920 年 12 月に公教青年会から発刊されるが、1939 年 7 月発行の十九巻四号からカトリック研究社に引き継がれ、『カトリック研究』に改題し隔月発行となった。二十巻からは岩波書店を発売所とし、1945 年 1 月発行の二十五巻一号で廃刊となる。太平洋戦争終戦後である 1946 年 5 月に『カトリック思想』と改題し、カトリック研究社から季刊で発行された。なお、上智大学神学会から発行されている雑誌『カトリック研究』は、創刊時は『カトリック神学』であったが、1972 年 6 月発行の二十一号から改題された別雑誌である。

(9) ル・フォールの経歴等については、以下の文献を主に参照した。

・フォン・ル・フォール、ゲルトルート、二巻 2019、三巻 2012、四

巻 2009、『ル・フォール著作集二〜四』ゲルトルート・フォン・ル・フォール著作集刊行会訳、教友社。
・Hemmen, Alcuin. 1948. “Le Fort on Women: An Analysis of Her Philosophy concerning Women.” M*onatshefte* 40 (5): 262–270.
・Von Gisbert, Kranz. 1976. G*ertrud von le Fort Leben und Werk in Daten, Bildern und Zeugnissen.* Frankfurt am Mein: Insel Verlag.

（10）ル・フォールのように、反ナチスの立場でありながら経済的事情や親縁や自らの思想的根拠などによってあえて留まることを選択し、ナチスに対して精神的抵抗を行った作家や知識人は「国内亡命（Innere Emigration）」者と呼ばれた（「国内亡命」という言葉は 1933 年に作家のフランク・ティース（Frank Thiess, 1890–1977）が用いた造語である）。第二次世界大戦後、トーマス・マン（Thomas Mann, 1875–1955）やハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906–1975）のように国外へ亡命した作家や知識人からは、精神的抵抗は抵抗運動になり得ないと批判の声が上がった。両者間での討論が行われたが、互いの主張は平行線をたどるばかりで大きな溝が残されることとなった（参照：Tomko, Helena M. 2017. “Beyond Exile and Inner Emigration: Rereading Max Horkheimer on Theodor Haecker’s D*er Christ und Geschichte* (1935).” T*he German Quarterly* 90 (2): 157–174; Kleineberger, H. R. 1965. “The ‘Innere Emigration’: A Disputed Issue in Twentieth–Century German Literature.” M*onatshefte* 57 (4): 171–180.）

（11）独文学者の船山幸哉は 1958 年に発表した「Urwesen としての『女性』――ル・フォール文学の基底について」（『ドイツ文学』第 21 号、56–61 頁。）にて、1939 年に発表された吉満の論文「文學におけるカトリシズム」が日本でル・フォールに触れた最初の文献と書いているが、実際にはその四年前に既に紹介されていたことになる。

参考文献表

○吉満義彦が手掛けた文献

フォン・ル・フォール、ゲルトルート、1935、「『聖心を祝える連禱』より」吉満義彦訳『創造』四号、三才社、46 頁。

吉満義彦、1934、「文學者と哲學者と聖者――モラリテの問題をめぐつて――」『創造』創刊号、創造社、1–7 頁。

吉満義彦、1935a、「ゲルトルード・フォン・ルフォールについて」『創造』四号、三才社、93 頁。

吉満義彦、1985、[初出 1935b]、「文学とロゴス」垣花秀武・加藤周一・渡辺秀編、『吉満義彦全集五』、講談社、383–386 頁。

吉満義彦、1935c、「時間の變貌――歴史と詩と行動」『創造』五号、三才社、6–14 頁。

吉満義彦、1937a、「詩と實存と愛――新しきモラルの問題――」『創造』十号、歐亞書房、4–9 頁。

吉満義彦、1937b、「象徴としての女性――神學的アントロポロギイの問題――」『創造』十一号、歐亞書房、50–62 頁。

吉満義彦、1938、「神秘主義概論」『廿世紀思想・神秘主義象徴主義』第四巻、河出書房、7–44 頁。

吉満義彦、1939、「文學におけるカトリシズム」『文藝』七月号、改造社、74–81 頁。

吉満義彦、1941、「倫理性と宗教性との実存的關聯」『季刊宗教研究』第三年第四輯、宗教研究會、44–55 頁。

吉満義彦、1942、「現代における神秘主義の問題」『理想』十月号、理想社、14–25 頁。

吉満義彦、1943、「パスカルの心戦に因んで――モオリアツク氏への手紙」『新潮』五月号、新潮社、15–23 頁。

吉満義彦、1979、「近代超克の神学的根拠――いかにして近代人は神を見いだすか？――」『近代の超克』、冨山房、59–82 頁。

吉満義彦、1948、『詩と愛と実存』角川書店。

○吉満義彦及び『創造』に関する文献

『創造一～十六号』、1934 ～ 1940、創造社（一～二号）・三才社（三～七号）・

歐亞書房（八～十六号）。
『カトリック思想――吉満義彦追悼号』、1946、カトリック研究社。
阿部善彦、2020、「吉満義彦と日本におけるキリスト教神秘主義研究――東洋的なものと西洋的なものの彼方――」『国士舘哲学』第 24 号、16–51 頁。
木村太郎、1946、「吉満追悼断章」『カトリック思想――吉満義彦追悼号』、136–137 頁。
佐々木亘・佐々木恵子、2021、「吉満義彦における神秘論の可能性――近代の超克とアクィナス、そして AI」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第 51 号、19–37 頁。
鶴岡賀雄、2008、「吉満義彦の『近代日本カトリシズム』」『季刊日本思想史』第 72 号、89–106 頁。
中山朋之、1992、「詩人哲学者・吉満義彦への断章（3）」『潮風』第 3 号、17–27 頁。
山之内一郎、1946、「『創造』と吉満さん」『カトリック思想――吉満義彦追悼号』、127–128 頁。
垣花秀武・加藤周一・渡辺秀編、一～四巻 1984、五巻 1985、『吉満義彦全集一～五』講談社。
吉満義彦帰天 50 周年記念出版の会編、1997、『永遠の詩人哲学者吉満義彦――帰天 50 年によせて』ドン・ボスコ社。
若松英輔、2014、『吉満義彦――詩と天使の形而上学』岩波書店。
若松英輔編、2022、『文学者と哲学者と聖者――吉満義彦セレクション』文藝春秋。
〇その他
青木玄、1987、「明治・大正・昭和初期カトリック信徒の宣教活動」『南山神学』第 10 号、177–196 頁。
大内三郎、1962、「日本プロテスタント史」『日本の神学』第 1962.1 号、90–97 頁。
大谷恒彦、1960、「キリスト教的な文学の問題点について」『九州工業大学研究報告人文・社会科学』第 8 号、21–27 頁。
竹本浩、2022、「エーリッヒ・プシュヴァラの『存在の類比』論――生成と十字架の神秘の主体的統合」『カトリック研究』第 91 号、1–44 頁。
濱中久美子、2010、「文学とキリスト教の狭間で」『大阪薬科大学紀要』第 4 号、41–57 頁。

船山幸哉、1958、「Urwesen としての『女性』――ル・フォール文学の基底について」『ドイツ文学』第 21 号、56–61 頁。
笛木美佳、2019、「遠藤周作と世田谷（一）」『学苑・近代文化研究所紀要』第 947 号、1–13 頁。
輪倉一広、2011、「岩下壮一の思想形成と哲学」『福井県立大学論集』第 37 号、73–85 頁。
石原謙、1967、『日本キリスト教史論』新教出版社。
海老沢有道・大内三郎、1970、『日本キリスト教史』日本基督教団出版局。
遠藤周作、1986、『心の夜想曲』文藝春秋。
遠藤祐・高柳俊一・山形和美他責任編集、1994、『世界日本キリスト教文学事典』教文館。
オーベール、ロジェ他、上智大学中世思想研究所編、1997、『キリスト教史 9――自由主義とキリスト教』平凡社。
小野寺功、2004、『大地の文学［増補］賢治・幾太郎・大拙』春風堂。
河上徹太郎他、竹内好編、1979、『近代の超克』富山房。
加藤周一、2010、『加藤周一著作集 18 近代日本の文学者の型』平凡社。
上智大学中世思想研究所編訳・監修、1982、『キリスト教史 10――現代世界とキリスト教の発展』講談社。
新カトリック大辞典編纂委員会編、1996、『新カトリック大事典』研究社。
柘植光彦編、2008、『遠藤周作――挑発する作家』至文堂。
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、1988、『日本キリスト教歴史大事典』教文館。
半澤孝麿、1993、『近代日本のカトリシズム――思想史的考察』みすず書房。
フォン・ル・フォール、ゲルトルート、1959、『手記と回想』前田敬作・船山幸哉訳、ヴェリタス書院。
フォン・ル・フォール、ゲルトルート、1960、『永遠の女性』永野藤夫・磯見昭太郎訳、ヴェリタス書院。
フォン・ル・フォール、ゲルトルート、二巻 2019、三巻 2012、四巻 2009、『ル・フォール著作集二～四』ゲルトルート・フォン・ル・フォール著作集刊行会訳、教友社。
三好千春、2021、『時の階段を下りながら――近現代日本カトリック教会史序

説』オリエンス宗教研究所。
村松晋、2014、『近代日本精神史の位相――キリスト教をめぐる思索と経験』聖学院出版会。
若松英輔、2011、『井筒俊彦――叡智の哲学』慶應義塾大学出版会。
若松英輔、2017、『小林秀雄――美しい花』文藝春秋。
若松英輔、2021、『神秘の夜の旅――越知保夫とその時代』亜紀書房。
Hemmen, Alcuin. 1948. “Le Fort on Women: An Analysis of Her Philosophy concerning Women.” M*onatshefte* 40 (5): 262–270.
Tomko, Helena M. 2017. “Beyond Exile and Inner Emigration: Rereading Max Horkheimer on Theodor Haecker’s D*er Christ und Geschichte* (1935).” T*he German Quarterly* 90 (2): 157–174.
Kleineberger, H. R. 1965. “The ‘Innere Emigration’: A Disputed Issue in Twentieth-Century German Literature.” M*onatshefte* 57 (4): 171–180.
Von Gisbert, Kranz. 1976. G*ertrud von le Fort Leben und Werk in Daten, Bildern und Zeugnissen.* Frankfurt am Mein: Insel Verlag.

（立教大学大学院キリスト教学研究科研修生　いしい・ゆみこ）